
美しい死

ツグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しい死

【Zマーク】

Z3360P

【作者名】 ツグ

【あらすじ】

お姫様を愛した魔王の物語

(前書き)

魔王は愛に狂っていた。

悲鳴のような、雄たけびのような声。痙攣する肉体。目はかつと見開かれ、僅かにあいた唇は何を言おうとしているが言葉にはならずただ呻く声だけが漏れだす。激痛にはやがて醜く歪む表情。それを見て彼はなんともいえない気持ちになつた。どうしてこうも醜いのだろうか。人の死というものを彼は醜いという言葉以外では受け入れられないでいた。彼の目の前にいるのは彼の愛した女性である。花を愛し、命を尊び、微笑むとまるでたくさんの美しいものがあふれ出るような彼女。彼女は美しかつた。だから彼は彼女を愛した。彼女にいつも贈り物を贈り、彼女が喜ぶために道化になることも厭わなかつた。そして、その愛は時としてこの世のすべてを無へと誘うほどの激しい感情でもあつた。彼にはこの世のすべてを破壊する義務があつた。なぜならば彼は魔王。世界の敵であり、世界を滅ぼす者。世界は彼の敵以外のモノではなく、彼はすべての魂の害であった。彼は何かを傷つけるための力は持つていたが、何かを救うための力は持つていなかつた。彼はたつた一人の美しい姫君を愛し、彼女へと手を伸ばした。そう、黒い手によつてこの世で最も美しい姫君を捕らえられた。彼女のことをただ見ているだけで彼ははじめは満足していた。満足すべきだったのだ。彼女は笑うと可愛らしく、太陽の下にいることがとても似合うお姫様だつた。この世で最も美しいといわれていたが、実際、そうだつた。清らかな心が彼女の肉体に輝きをもたらしているかのようであつた。魔王は姫に恋焦がれた。生まれたときから、暗い闇の中にいた彼は太陽を憎んでいた、嫌つていた。それが嫉妬からの感情だつたのもしれない。彼はなにもの求めることが惨めさを知つてゐる。ゆえに憎んだ。自分にないものすべてを憎むこそが自分の生まれた義務だと思つたからだ。それは大方間違いではなかつた。彼はそのためにこの世に生まれた

のだ。彼もまたこの世界に生まれるべくして生まれた存在であった。世界には時として凶器が必要だ。人が人と争わないために。そのために神様が生み出した神が彼なのだ。彼は必ず世界を憎むようにと生み出した。そして彼は彼が知らぬ間に世界を激しい憎悪と嫉妬にゆがみにゆがんだ感情によつて喰らおうとする。だが必ず彼は人の手によつて討たれることが約束されていた。しかし、彼はそんなことは知らなかつた。何故ならば、彼は魔王であり、この世の敵であり、害であり、神が与えた唯一の人々が人であるがゆえに争う義務を失わせるための慈悲なのだから。彼には本能があるだけであり、それ以外のモノはなかつたはずだ。しかし、彼は美しいものに目を奪われ、それに嫉妬も憎悪も、なにもかも本来持つ感情を失つた。それは愛することだつた。それは彼が持つてはならない、本来は彼の中にはあつてはならない感情だつた。魔王は美しい姫君を攫い、塔に閉じ込めた。自分のこの激しい感情を理解できなかつたからだ。姫は泣いていてもまた美しかつた。美しい姫君は慈悲深かつた。それはこの世にあつてはならない慈悲だつた。彼女は魔王に微笑みかけ、手を伸ばした。魔王はその優しさに身を焦がした。これが人の愛なのか欲望なのか分からず、ますます憎悪を強め、人を憎んだ。憎むことこそが彼が彼である唯一の形であつたからだ。何かを呪うことでしか生きられぬ魔王を姫君は哀れみをこめて見つめた。それは愛ではなかつた。しかし、彼が愛と思うには十分だつた。魔王は姫君を愛したと自分で思つた。手を伸ばして、その姫君が握り返してくれるこことだけに安堵を覚え、幸福を覚えた。だから人間を同じくらいの気持ちで憎むことも出来た。彼は姫君を愛しながら、それ以外の者を屠ることに余念がなかつた。いずれは自分を殺しに来る者のことも彼は感じながらもそれに怯えることもなく姫君と共にいた。彼は自分がどうしてこの世に生まれたのか、姫君を通して理解したからだ。理解しながら、それを受け入れた。自分は世界の敵なのだから。しかし、悲劇は訪れた。彼が死ぬ前に姫君が死んだ。病に倒れた彼女を魔王は哀れみ、激しい憎悪で戦慄いた。流行り病に

かかつた姫君の美しい顔は歪み、苦しみにもがき、醜い最後を訪れた。それは醜かつた。悲しいほどに醜く、魔王は姫君を醜いと呟き、その瞬間に愛が破壊されたのがわかつた。自分は姫君の醜さを受け入れられない。魔王は狂ったように叫びあげた。しかし、魔王でも人の命を生き返せることは出来ない。だから彼は姫君の時間を一日だけ戻した。それが彼に出来る唯一のことだった。だから姫君は一日ごとに死ぬ。苦しみ、呻き、痙攣し、唾液と血を口から吐き出して。彼はそれを眺める。何度見ても、彼女の死は醜い。魔王はその度に愛の喪いを感じ、それを受け入れられずに時間を戻す。美しい死を彼女に与えなくてはいけない。この愛を喪わないために。

魔王は愛に狂っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3360p/>

美しい死

2010年12月5日23時10分発行